

ホラズムの時代區分

ヴァデイム・エリセエフ

アジアの一般的な歴史が大きな文化圏、例えば支那や印度やイランの研究であつたのはやつと三〇年前の事であります。普通にはこれらの國々の歴史を、その文化の中心地帯がとなりの國や他の中心地帯に及ぼした影響と相互の關係によつて説明する事が勤められました。東部アジアでは、とくに日本の歴史學者のおかげで多くのむづかしい問題が明かにされました。ソ聯領である中央アジアにおいては、主としてロシア人のおかげでその地方の歴史が明かにされました。最近一〇年間に、ホラズムについてはトルストフ (Tolstov) 先生、ソグディアナ (Sogdiane) についてはヤクボフスキー (Yakovlevsky) 先生、バルティア (Parchie) についてはマンン (Masson) 先生、セミレチエ (Semietchie) についてはベルヌシタム (Bernsham) 先生という風に、多くの學者達のお

かげで、中央アジアの邊境地域の殆ど中斷されない歴史が解りました。この歴史は常にフランス史學界の興味を引きました。又中國領トルケスタンにおけるフランスの踏査隊の功績と、ペリオ (P. Pelliot) 先生の研究、並びにこの地方におけるアフガニスタンとイランのフランスの踏査隊の功績も忘れないようにしたいと思います。それで我々はゴダル (Godart) 先生とシュルンベルジェ (Schlumberger) 先生とギルシュマン (Gishman) 先生に續いて、これらの國の隣接地域においてなされた研究に参加する事に興味を持つのであります。こういうわけで、私は今日はホラズムの新しい年表の概略に従つて、これらの國についてお話ししようと思います。

前置きとして、中央アジアにおける舊石器の最初の例は、一九三八年にトゥルガン・ダリア (Turghan Darya) におい

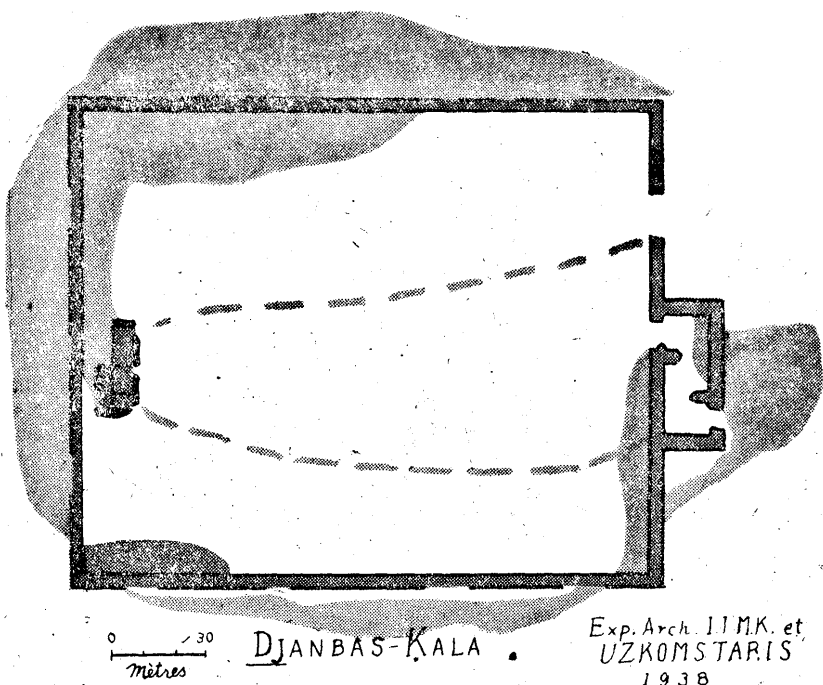
器の裝飾と似ている事です。これらの事實は他の幾つかの事實と相俟つて、トルストフ教授をしてムンダ・ドラヴィディアン (Munda-dravidians) 及びフィン・ウグリアン (Finno-ugrians) 時代におけるホラズムが、印度と西北アジアとの間の大切な結び目であつたと考えさせました。このケルトミナルと云う段階は、アフアナシエヴァ (Afanasyeva) 文化とアナウ (Anau) 文化とを結ぶ鎖として現れています。その後この關係は、キルギスタン (Kirghistan) とタザバギアブ (Tazabagiab) において發見されたアンドロヌヴォ (Andronovo) 式の參考資料によつて證明されました。

これから紀元前一五〇〇年頃の青銅器時代に相當する第二段階に入ります。タザバギアブの資料は、牧畜と農耕とをを持ったあぜくら式クルガン (Kurgans) 形式に屬しています。そのこの平らな底を持った陶器は、アンドロヌヴォばかりでなく、南部トルクメニスタン (Turkmenistan) をも思ひ出させます。この櫛目紋・押形紋・條痕紋による三角形や尖った形をした陶器の裝飾は、紀元前一〇〇〇年頃のシナ・カラスク (Sino-qarasung) の大きな層に屬しています。同じ形式

の陶器がアナウとアシカバド (Ashkabad) とタシケント (Tashkent) にも存在しています。タシケントには底が平らで内側が毛皮や布れで磨かれた濃い色をした粘土の土器があります。シナからカスピ海に及ぶシナ・カラスクの文化は、冶金術、牧畜、農耕及び家長制の社會構造によつて特徴づけられています。

その原始時代の第三段階はアミラバド (Amirabad) と呼ばれて、紀元前一〇〇〇年から五〇〇年までにわたっています。タリバルズー (Talbarzu) においては、紀元前遺蹟の最も古い要塞の一つが、園藝と農耕の存在した事を示しています。同時代のアケメネス朝の文獻によれば、サカ族に歸せられるチルク (Chirchik) の遺蹟と、六世期から四世期までの銅器と鐵器のあるカワンチ (Kavanchi) の遺蹟とが結びつけられなければなりません。又ここで動物の灰、磨石 (Polishing) 鏃、臼及び家、駱駝、牛、羊などの骨が見附けられました。それは五世期のクテシアス (Ktesias) という歴史家が語ったサカの國の特色であります。

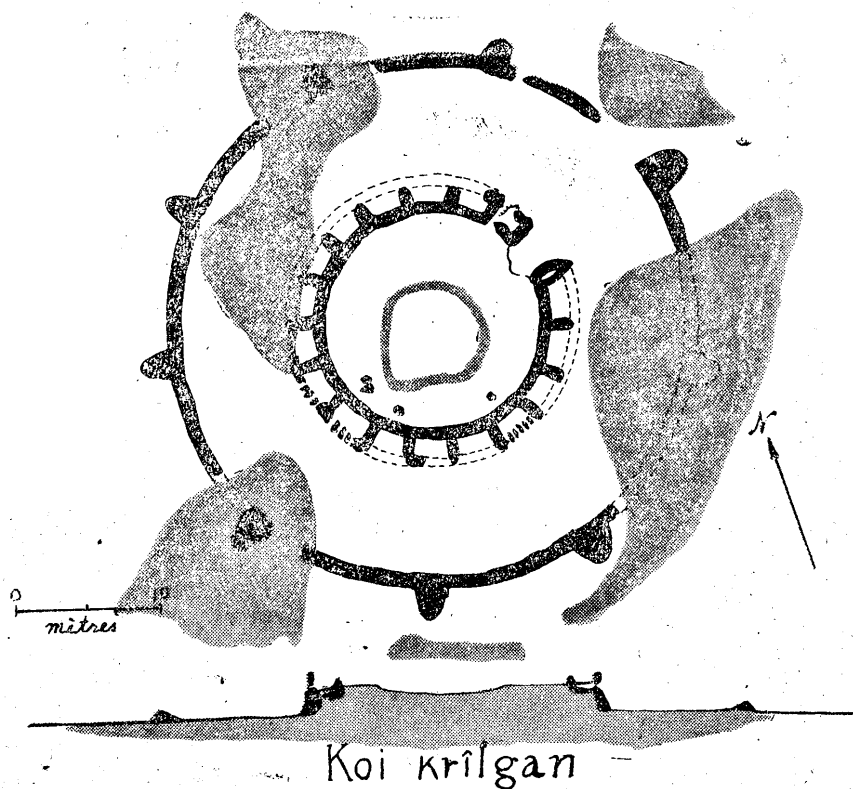
古代ホラズムの時期は、四期から八期までの五段階を含ん



でいます。

第四期は五〇〇年から西暦紀元前後までのアケメニドという段階であります。この段階では、数十キロメートルに及ぶ地下水路によって運河を改良しました。その結果として、從來北と東とに向つていたホラズム及びその近隣の國々はイラン世界に引附けられました。それ以來、その歴史は一部分アケメネス朝帝國の歴史に入る事になりました。

第五期は紀元前三世紀から紀元後一世紀に及ぶギリシア風の段階です。この時期は、周圍が矩形でジグザグ形の入口のあるヂャンバスカラ (Djambaskala) という砦によつて特徴づけられています。ここで多くのギリシア風の小さな像が見られました。トルストフ教授によれば、この式の砦は主人と奴隸との對立が大きくなり始めた頃の社會構造の現われです。同じ時代に、コイクリルガン (Koi-kirilgan) という砦が屬しています。ここで二つの層が発見され、一つはセミレチエにおけるウソン (Wosonen) の遺蹟を思わせ、一つはテルメーズ (Thermes) と黒海のギリシア風文明を思わせます。又衣服はアケメネス朝ペルシアやバミヤン (Bamiyan) のフ



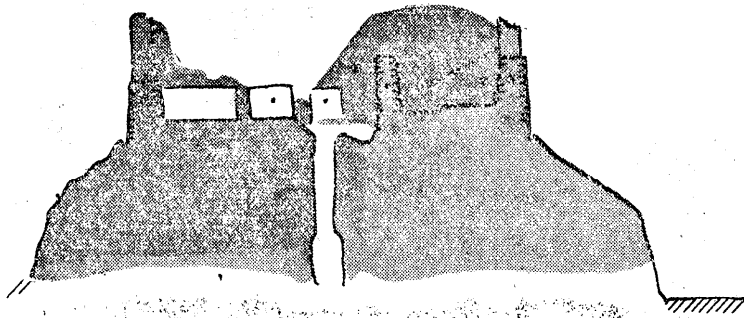
Koi krilgan

レスコに見られたものを思い出させます。

第六の段階は、一世紀から三世紀までのクシャノ (Konehane) というローマ風時代です。一九四六年に、トルストフ教授はこの時代に属するトブラカラ (Toynkal'a) という砦を発見しました。そのアイルタム (Airtam) における音楽家の模様を思い出させるフレスコの畫風は、ギリシア風とシリア・エジプト風との混合によつて非常にガンダラ風であります。この混合はその畫に非常にオリデナルなホラズム風の特徴を與えています。

第七の段階は四世紀から六世紀までのクシャノ・アフリジドの時代です。その時代に属するものとしてヴァラクシア (Varaksha) の遺蹟があります。この遺蹟では、幾何學的模様で飾られた壁面、デートレンプ (Détrempé) によつて畫かれた狩獵の場面、末期ギリシア風の浮彫などが發見されました。トルストフ教授は、この遺蹟がマフムド・モシアキ (Mahmud Moshaki) によつて描かれたブカル・クダ

ル (Bukhar Khutai') の宮殿であらうと考えています。



TASHIK-KALA

0 1 10
metres

EXP. ARCH
I. I. M. K. 1938

第八の段階は、七

世紀から九世紀までのササノ・ムスルマン・アフリヂド (Afrides sassano-muslimans) という時代です。七世紀のタシクカラ (Tashik-kala) という住居はこの時代に属します。この建物のタイプは、團結した百姓の封建領主に對する戦いによる封建制度の變革と相應します。發見物によれば、次のような事が

推定されます。即ち七世紀のホラズム人は、カナリヤサードと、燕麥、豌豆、胡瓜、メロン、桃を栽培耕作し、馬、駱駝、羊を飼っていました。貨幣はアフリヂドの王の像を持っています。又箠と鞭を持った騎士が見られます。この模様は、紀元前にバクトリア (Bactriane) で多く用いられました。これによつて、トルストフ教授はこの地方にホラズム文明の起源を置くことができると考えています。又トルストフ教授は、この貨幣がホラズムのものであり、そこに書かれた文字は、ソグド (Sogdiane) のものによく似ているが、多分より原型に近いであらうと考えています。騎士の持物は、ササン朝やスキタイのとは違いますが、ソグドや東トルケスタンやモンゴリアのには似ています。そうしてクシヤンはこの東方との關係において大きな役割りを果たす事が出来ました。シナの文獻によれば、アラビヤ人による征服以前に、ホラズムの王がクシヤンから出たと云う事が考えられます。要約すれば、トルストフ教授は中央アジアがササン朝ベルシアの文化圏に屬したと云う従來の説を捨て、紀元前五〇年頃から、東南及び北西の國々と關係のあつた獨立した文化がそこにあ

つたと信じています。又この時代に属するものとして次のようなものを用意したいと思います。それはデンギス・テペ (Gangis Tepé) にあるササン朝時代の遺蹟、パイクアンド (Paikand) にある盧・ザラフシヤン (Zaravshan) 溪谷のムグ山 (Mt. Mugh) から發見された八世紀のシナやソグドの文書、アングレン (Angren) 溪谷における大きな遺蹟などです。

中世のホラズムの時期は、一〇世紀から一一世紀までのセルジュキド・アフリギドと云う第九段階であります。第十段階、即ち一二世紀から一三世紀までは、純ホラズムと呼ばれます。アイルタム (Airtam) 附近で、ウラル (Oural) のものを思い出させる一一—二世紀の圓形浮彫が發見されました。

第一一段階は、ホラズム・ヂウチド (Khorezmo-Djoutchid) と呼ばれます。これは一三世紀から一四世紀までにわたつてをり、パイクアンド (Paikand) 附近の遺蹟を含んでいます。

以上ホラズムの文化を中心として、隣の國々の事もお話しました。それはトルストフ教授がその新しい研究によつて、中央アジアを次のような二つの地帯に分けて考えているからであります。すなわち一つは中央地帯で、ホラズム、ソグ

ド、バルティア、トカレスタン、フェルガーナを含んでをり、他の一つはその周邊地帯で、中央地帯より文化の遅れたカザクスタン、セミレチエ、天山を含んでいます。この中央地帯はアケメネス朝ペルシアや黒海地方と關係を持っています。この中央地帯のおかげで、紀元前六世紀—四世紀の小アジアの構圖がノイン・ウラ (Noin-ula) に見られるのであります。ドウラ・ウーロ波斯 (Doura-Europos) でイエニセイのスキタイ模様が、またホラズムでボスフォールの地下廊の寫が見られもするのであります。遊牧民と定住民の間の結びの役をする中央アジアの研究においては、文化の段階附けは、一般にホラズムに結び附けて行われていますが、實際には、特殊の文化を持つ幾つかの中心に關係しているのです。そういうわけで、ホラズムの圖にベルンシュタム (Bernshtam) 教授によつて作られた東部中央アジアの年表を加えたのであります。トルストフ教授とベルンシュタム教授の新しい研究では、この地帯の歴史を動かした相互反應を説明するためにこの中央地帯を區別するようになっています。

キプロス島のアラジアの發見に就いて

キプロス (Cyprus) でシャフェル (Claude Schaeffer) 教授の指導の下にフランスの踏査隊によつてなされた新しい大きな發見を附け加えたいと思います。

ずつと以前に、テル・アマルナ (Tell Amarna) の遺蹟で、アミノフィス四世と云うツタンカーメンの父と、キプロスのアラジア (Alasia) の王との間の通信文を内容とするタブレット (tablettes) が發見されました。併しそのアラジアと云う都は永らく見出すことができませんでした。一九四七年以來、シャフェル教授は、その町がエンコミ (Enkomi) の隣であると考え、そこに立派な遺蹟を發見しました。最も古い遺蹟は、紀元前の二〇世紀から一七世紀位のもので、そのころアラジアはシュメル語で、アラス (al-as) と呼ばれる銅をユーフラテス (Euphrate) まで輸出し、青銅文化の繁榮した中心地でした。この發見はテル・アマルナやマリ (Mari) やラス・シャムラ (Ras Shamra) の文献によく合っています。紀元前一四世紀に、この町は地震によつて毀れました。紀元前一四

世紀から一三世紀にかけて、この町は再び盛んになり、巨大な石の城壁で取り圍まれていました。その土臺が發見されています。ところが、紀元前一三世紀にギリシア・アナトリアの軍隊によつて征服されました。その結果、このミケーネ式の盛んな文化は終を告げたのであります。併し征服者達もこの傳統を持ち傳えました。とうして紀元前一二世紀頃作られたアポロン (Appolon) の原型であるネルガル (Nergal) という神を現わす立派な青銅と象牙の像が存在しています。このキプロスの保護神であるアポロンはシリアに起源を持つ事を示しています。この發見は、前期ギリシア藝術のアポロンの起源の問題を再び提起するものであります。

中央亞細亞の時代區分 Asie Centrale

	<u>Occidentale</u> Sapis Tolstov	<u>Orientale</u> Sapis Bernshtam
	I <u>Khorezm primitif</u>	
3500	1. Keltminnr (néol. énéol.)	
2000	2. Tazabagiab (bronze)	
1500		
1000	3. Amirabad (fer)	1. Seythes Sogdiens (VII ^e -IV ^e)
	II <u>Khorezm antique</u>	
500	4. Achéménides	2. Sacès (380-250)
III ^e	5. Kangini (hellenistiq.)	3. Sogdians (Parthes)
II ^e		(250-140)
I ^e BC.		4. Kouchanes-tokharestan.
I ^e AD.	6. Kouchane (romaine)	(140-180)
II ^e		5. Kouchanes tardifs
III ^e		(180-420)
IV ^e	7. Kouchane, Afrigides	
V ^e	(Sassanides)	6. Huns hephthalites
VI ^e		(420-570)
VII ^e	8. Afrigides	7. Turcs sogdiens (570-783)
VIII ^e	(Sassano-musulm.)	
IX ^e	III <u>Khorezm médiéval</u>	
X ^e	9. Afrigides	
XI ^e	(sassano-seldjouk.)	
XII ^e	10. Culture khorezmienne	
XIII ^e	pure.	
XIV ^e	11. Khorezm-Djoutchid	
	(Koule Sor)	

- 1) *S.P. Tolstov* Fouilles du Khorezm in. Krstk. soyf. inst. ist. mat. kuet. Ak. Nauk. XII. 1946.
- 2) „ „ Izv. Ak. Nauk. ist. fil. set. 1947.
- 3) „ et Vest. Drev. Ist. 1938. 1. et sqq.
- 4) „ Le Khorezm ancien-thèse de doctorat. 1942 1 Vol.
- 5) „ Sur les traces de la culture Khorezmienne. 1948. 1 Vol.
- M.E. Masson* Sur l'histoire des Sarmates, Krat. soob, inst. ist. mat. cult. 1946-47.
- 6) *A.N. Bernshtam* Histoire de l'Asie Centrale-Vest. Drev. Ist. 1947.3
- 7) *A.V. Zbronev* Liens culturels entre l'Asie Moyenne et l'Oural dans l'antiquité. Vestnik Drevnei Istorii 1946-3.

Ayant rédigé ce texte loin de mes mots je m'excuse de ne pouvoir dresser ici une bibliographie précise et complète.